

京都府立大学山岳会山小屋誕生秘話

発案から実現まで25年！
現代版わらしべ長者物語



京都府立大学山岳会前事務局長
井川 裕さん
京都府立大学農学部林学科1965年卒

山岳部関係者だけでなく家族や友人、府大生などさまざまな人が利用できる山岳会の山小屋。ここで青春の思い出を作った同窓生も少なくないのでは？ 同会前事務局長の井川さんに山小屋誕生の経緯をご紹介いただきました。



山小屋誕生のきっかけを作った武居三郎さん。

私たち京都府立大学山岳会（山岳部OB会）が所有する山小屋は、白馬山麓を長野県白馬村から新潟県小谷村に伸びる千国街道（通称塩の道）から白馬湖池へ登る途中の落倉高原にあります。標高860m。夏でも涼しく冬は2m近い豪雪の地。5月には水芭蕉の群落に彩られ、夏には白樺林を渡る緑の涼風に暑さを忘れ、澄み渡った空の広がりに葉末の露に秋の訪れを知ります。晩秋には白馬連峰からの風が一晩で錦秋の落倉高原を白衣の森へと変え、その変化の妙に驚かされます。

12坪の小さな山小屋ですが敷地は約800坪で20名宿泊可能。シャワーも完備していますが、近辺には素晴らしい温泉がたくさんあります。温泉で温まった後、山小屋外の焚き火を囲んでの食事と団欒のひとときはちよつとほかでは味わえない楽しみです。

山小屋誕生のきっかけを作ったのは武居三郎さん（農学部農芸化学科1956年卒）。1957年3月の剱岳遭難事故が終結し、再び部活動が活発になってきた1960年11月の山岳会会報で「山小屋を建てませんか」と呼びかけたのが始まりです。

同年12月の会報には塚本圭一さん（京都府農林専門学校農科1951年卒）が「私たちがつこう」としている小屋は合

宿の基地にするためではない。四季にかわる四辺の風景の中で、山の生活を、山の命を語る場としての山小屋がほしいのだ」と述べ、この心が現在にも引き継がれています。

翌年9月には早くも八方尾根山麓の白馬村細野地区北咲花に152坪の土地を118千円で購入し、建設資金が思うように集まりません。当時の大卒初任給1万円前後の時代。いつしか山小屋建設の話も遠のき6年が経過。1968年7月北咲花の土地が無断で砂防工事用道路として削られていたことが判明。白馬村との交渉の結果、北咲花の少し下の和田野（奥咲花）に182坪の土地を代替地として取得します（1969年7月）。しかし再び時間だけが過ぎ、その間、建設資金の目標額がどんどん上がっていき、山小屋建設の夢は遠のきます。

時代はまさに高度成長期に突入、奥咲花のわれわれの土地の回りはいつの間にかペンションや別荘街に変わってしまいました。1982年9月、白馬山麓や八方尾根山麓を開発している土地開発会社から奥咲花の土地の譲渡の話が浮上します。東京在住の竹村義弘さん（農学部林学科1959年卒）が中心となって開発会社と交渉、奥咲花の土地と桐池高原の土地380坪に山小屋を建てて等価交換することとなりました（1983年4月）。土地パブルのおかげで奥咲花の土地が724万円の高値になっていくことが幸いしました。

しかし、その後取得した桐池高原の土地は境界確認ができなかつたため、2km下方の落倉原に150万円で400坪を新たに購入し、ようやく建設にこぎ着けました。

発案から実現まで25年。現代版わらしべ長者を地で行ったような話で、よくもこれだけいろいろなことが起きたものです。情

1985年11月の小屋開きから今年で26年。山小屋担当委員の岩佐吉洋さん（農学部林学科1965年卒）を中心に小屋設備の更新や維持管理が毎年続けられ万全の状態にあります。原則として山岳部関係者同伴であればなたでも利用できます。私たちはこれからも山小屋の維持管理に努め、多くの利用者・来訪者を迎え、山小屋生活を通じて府大に学ぶ多くの人たちの輪を拡げていきたいと願っています。



山小屋開設20周年記念祭のヒトコマ（2005年10月）。故・四手井京都府立大学元学長揮毫の表札がついています。水道、電気、自炊設備完備、湯水も出ます。利用料金は1人1泊2000円（現役府大生無料）。



落倉原落原の水芭蕉。

府大山岳会山小屋の利用宿泊をご希望の方は下記へご連絡ください。

連絡先 京都府立大学山岳会事務局長・藤井良太宛

TEL:080-5343-0960
e-mail:ryota_wv@yahoo.co.jp